

VI 収支編

経済性はどうなの？

①生産に係わる費用(耕種側)



食用品種

600	重量 (kg/個)	300
4,000	販売単価 (円/個)	2,000
1	収量 (個/10a)	10
4,000	販売収入 (円/10a)	20,000
17,841	生産経費 (円/10a)	27,841
-13,841	収支 (円/10a)	-7,841



専用品種

②助成金、交付金関係(耕種側)

道枠 (円/10a)	地域枠 (円/10a)	戦略作物助成金 (円/10a)	合計 (円/10a)
21,000	9,135	80,000	110,135

※道枠、地域枠は目安です(恵庭事例)

品種問わず助成金は同じです。
交付金は地域、作付状況によって異なるので注意が必要です



③収穫に係わる経費

○食用品種(モアコン→ロールベラー)

収穫・調製費 (円/10a)	ラップ等資材費 (円/10a)	委託作業料計 (円/10a)
29,400	2,400	31,800

○専用品種(ダイレクト)

収穫・調製費 (円/10a)	ラップ等資材費 (円/10a)	委託作業料計 (円/10a)
15,000	10,780	25,780

④合計収支

○耕種側

品種	生産物収入 (円/10a)	交付金収入 (円/10a)	収穫経費 (円/10a)	合計収支 (円/10a)
食用	-13,841	110,135	-31,800	64,494
専用	-7,841	110,135	-25,780	76,514

○畜産側

品種	生産物支出 (円/10a)	交付金収入 (円/10a)	収穫収入 (円/10a)	合計収支 (円/10a)
食用	-4,000	0	29,400	25,400
専用	0	0	15,000	15,000

※専用品種は委託事例のみで生産物支出を考慮した収支は不明です

上記はあくまでも試算です。経費、交付金等で最終的に手元に残る金額が大きく変わるので注意が必要です。
現状では戦略作物助成金がないと経営的には成り立たないです。
収穫作業受託側(畜産)にもメリットはあります。



～ さいごに ～

1 稲WCSの流通・需給状況

飼料作物作付面積(WCS用稲)

(単位:ha)

	2018	2019	2020	2021	2022
全国	42,545	42,450	42,791	44,248	48,404
北海道	540	573	574	620	900
都府県	42,006	41,877	42,217	43,627	47,504
関東	4,028	3,944	3,968	4,302	4,797
茨城県	550	527	535	571	603
栃木県	1,626	1,620	1,614	1,769	2,012
群馬県	519	528	514	539	584
埼玉県	120	106	118	116	136
千葉県	984	912	933	995	1,129
東京都	-	-	-	-	-
神奈川県	-	-	-	-	0
山梨県	12	12	14	15	16
静岡県	217	239	240	297	317

資料:作物統計(毎年収穫期時点)

北海道では、年々作付けは増加傾向。

しかし、都府県と比較してその割合は低い。

収穫や給与の方法が浸透しておらず、課題が多い。

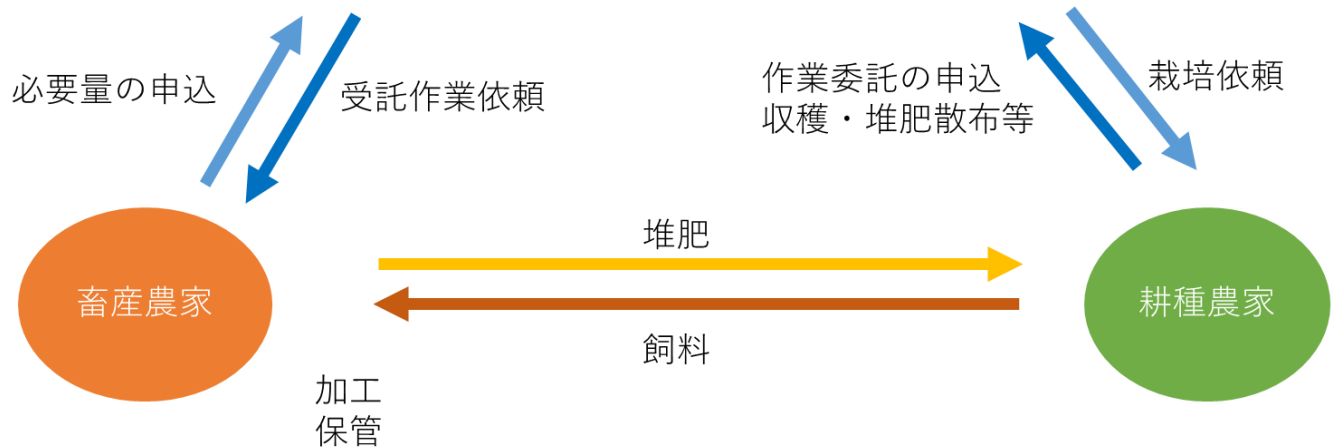


都府県では・・・



〇〇地区耕畜連携協議会(仮称)

栽培面積の調整
受託作業の調整

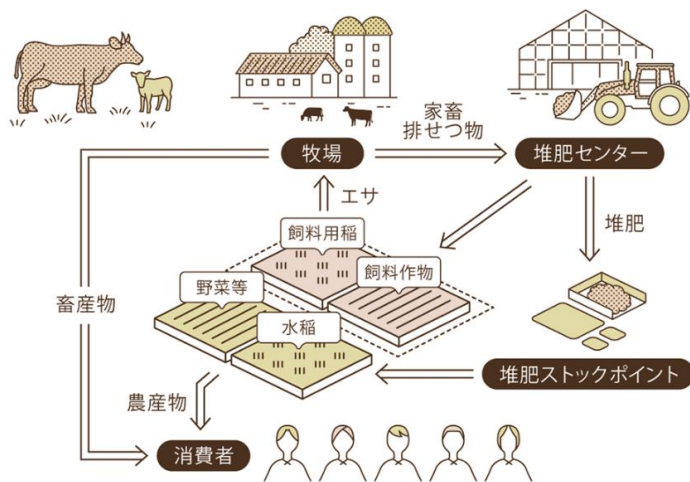


- ・ 耕種、畜産農家が抱える課題解決のため、耕畜連携を進めるエンジン「耕畜連携農業推進協議会」を設立し大きな役割を果たしている事例がある。
- ・ 稲WCS活用として、品種選定、栽培技術、収穫、調製、給与を体系化した農業者・関係機関が一体となった取組がポイント。
- ・ 結果として、耕種、畜産農家双方にメリットがもたらされた。

北海道も、地域一体となった取り組みが必要ではないか？

2 まだまだある北海道での需要

- ・ 輸入乾牧草の高止まりが続く中（2023年8月で1トあたり5万9000円）、大規模畜産農家を中心に粗飼料の確保対策が急がれています。
- ・ 円安の進行などが要因となっており、2021年以降高騰が続き、高騰前の20年より5割も高い水準になっております。
- ・ 畑作地帯である十勝地方でも粗飼料確保が課題となっており、水田地帯で作られる稲WC Sを **2万ロール** 確保して欲しいという要望もあります。



(画像：JA全農ひろしま3-Rとは | 耕畜連携資源循環ブランド3-R (zennoh.or.jp))

地域内循環が理想的な形となる一方で、道央地帯の畜産農家は比較的粗飼料が潤沢に確保されている状況があります。

需要に不安を抱える耕種農家がいる一方で、広域的には需要があることはあまり知られておらず、流通に課題があると言えます。



2024年問題、深刻なドライバー不足により物流に不安がある中で、より効率の良い物流体系が求められています。

広域的に稲WC Sを流通する場合、行き荷でロールを搬送し、帰り荷で堆肥（ペレット化したもの）を輸送することができれば、家畜糞尿処理や土づくりの問題にも寄与できる取り組みになることが期待されます。



おわりに

令和4年から手探りの中栽培を始めた稲WCSですが、取り組み開始から3年が経過し、耕種側、畜種側のデータを集めることができました。

このことにつつましては、ひとえに生産者、畜産農家の方々の協力があったことです。

そのチャレンジ精神に応えることができるように、これからも普及センターが支えとなれるような活動を行ってまいりたいと考えております。今後も調査を継続し、本書が稲WCSを経営の中に取り入れる際の一助になることができれば幸いです。

引き続き皆様のご協力をお願い申し上げて、協力いただいた全ての皆様に感謝の意を表したいと存じます。

石狩農業改良普及センター 課題解決研修メンバー一同